

浄信寺通信

平成14年夏号

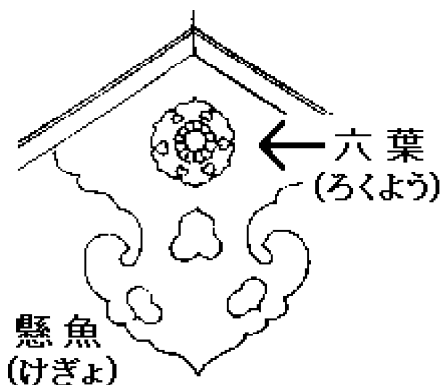
名古屋市中村区名駅五丁目二〇番三
宗 教 法 人 浄 信 寺 収 益 事 業 部 羽 塚 孝 和
TEL (〇五二) 五六一一七三六
頒布価格年 千三百円
(檀信徒会費)

(け ぎよ) 懸魚と六葉 (ろく よう)

日本の社寺の建物には、「懸魚けぎよとか六葉ろくよう」が、飾りとして付けられている。懸魚は大陸から伝来し、火災から建物を守るために、火除けの呪まじないとして取り付けたのが始まりとされている。懸魚は魚が転化した形で、その語意は「魚を懸かける」を意味し、川や海（西本願寺には海人あまの飾りすらあると聞いている）や水と関連の深い魚と掛けて「水を掛ける」にも通じ【語呂合わせ】つまり、水の代替えとして魚を屋根へ掛けて、降水による火伏せひぶせを祈る呪じゆふの呪符じゆふであり、江戸時代には、一般庶民の民家には、禁止されたので、社寺仏閣の特別なステータス・シンボル



浄信寺本堂（北側）の懸魚と六葉



の象徴にもなつて来た。大きな木造建築に於いては、建築学的に棟木や桁けたの鼻を風化から守る役目もあつたと言われている。

他に神仏の加護にすがって災禍を避ける例として、城郭の天守に上せてある「鯨（しやちほこ）」や東大寺の大仏殿の「鷗尾（しび）」も同類です。

懸魚の呼び名は、古い年代では「掛魚」と「懸魚」の文字が使われ、「けんぎよ」と読まれていたようですが、今日では「げぎよ」と濁つて発音しています。

六葉は、懸魚の中心に付いている飾りです。六枚の葉で構成する六角形の図柄から付いた呼び名です。六葉を留めている中心の丸い棒が「樽の口」、その根元にあるのが「菊座」ですが、名前のとおり酒樽の口を栓で止めた状態に似ています。六葉の形は、六角形の図柄のものが多く、六葉は日本独自の様式と言われています。寺院建築の意匠いしょうの特色です。当寺の懸魚や六葉も、長い風雪に耐えてその姿を残しています。ご参詣の折りに、是非ご覧下さい。

平和公園墓参のご案内



日 時 : 8 月 1 2 日 (月)

1 3 日 (火)

: 午前 8 時頃 ~ 午後 1 時頃

お盆を通じ亡き人への愛情や感謝の気持ちを大切にすることは、同時に今生きる自分を大切に生きる生き方でもある。

「いろは歌」に秘められた謎

いろはにほへと
ちりぬるをわか
よたれそつねな
らむうみのおく
やまけうこえて
あさきゆめみし
ゑひもせず

色や香りは消え去ってしまふ。
この世で長く続くものは何があるか？
今日という日は、無のない深い淵の中に消える
それはつかの間の夢の姿に過ぎない
それはほんの少しの悩みをつくるだけである

色は匂へども 散りぬるを 我が世誰ぞ 常ならむ
有為の奥山 今日越えて 浅き夢見じ 酔ひもせず

日本人に一番なじみのあるお経に、「般若心経」があります。その経文の「色即是空 空即是色」という言葉は有名です。

般若心経はわずか二六六文字の短いお経ですが、大乘仏教の中核思想の一つである「空」の理論が見事に要約されている経典です。

それには、一言で言えば、この世のありとあらゆるものはすべてみな空だというのである。

と言っても何もないということではなく、何物にも不変の実体がないことかというところ、すべては因縁によつて生じ、因縁によつて滅するということなのである。
因とは原因のこと、縁とはそれを助ける条件のことで、因と縁がかけ合わさつて物が生じ、因と縁が離散することによつて物は姿を消すのである。

又誰でもが一度は聞いたことある言葉として「平家物語」の

祇園精舎の鐘の聲 諸行無常の響きあり 沙羅双樹の花の色 盛者必衰の理をあらわす おごれる人も久しからず ただ春の夜の夢のごとし 猛き者はついには滅びぬ ひとえに風の前の塵に同じ があります。

その大意は、祇園精舎の鐘の音には、諸行無常の響きがある。釈迦入滅の際に咲いたと言われる沙羅双樹の花は栄える者はいつかは滅びるといふ真理をあらわしている。おごり高ぶる人は、いつまでもおごっていることは出来ない。それはまるで春の夜の夢のようにはかない。勢力の強い者もいつかは滅びる。それは、風の前の塵とおなじである。

ここに出てくる、「祇園精舎の鐘の音」は、これは病僧の臨終の際に、自然に鐘が鳴つて『無常偈』あるいは『施身聞偈』とも言う偈の『諸行無常 是生滅法 生滅滅已 寂滅為楽』が説か

れ、病僧は、苦難を忘れ、覺りの境地に至り往生すると言われている。

諸行無常 是生滅法 生滅滅已 寂滅為楽
の意味は色々な訳があり概ね、この世のすべての存在、現象は一点に止まることなく常に変化し移り変わっていく。生じたものは必ず滅び、消え去っていく。これがこの世の法則である。

生じ滅する諸現象にとらわれて生死や諸種の苦悩にさいなまれる自分の心を滅せよ。そうすれば涅槃寂靜の境地（安心立命）に至り、どんな苦悩や災厄にも動かされない、常に平穩で安樂な状態に到達するのである。そんな意味である。

この話しのモチーフが、釈迦の前世に於ける菩薩の時の善行を集大成したものを「ジャータカ」と称され、あるいは「本生譚」とも言われる有名な話しがあります。

『大般涅槃經』の聖行品の「雪山童子」の物語として、今に語り継がれています。

「雪山童子物語」

釈尊が前世の菩薩時代にバラモン仙人と雪山（せつせん）ヒマラヤのこと）中で修行していた。これを雪山童子と言う。

無仏の時代で仏の説法や經典など、求めても得られなかった。

ときに帝釈天は、この修行者が身を捨てて覚悟で、法を求めていくかどうかを試してみるために、恐ろしい羅刹（人を食うという悪鬼）の姿となり、修行者の近くで無常偈の前の半分「諸行無常、是生滅法」を唱えた。微妙な声

で、今まで聞いたことのないすばらしい偈が聞こえたので、修行者はどこから誰が唱えたかと思つて周囲を眺めるが、恐ろしい羅刹以外には誰もいない。修行者は恐ろしさも忘れて羅刹に近づき、「今のすばらしい偈はあなたが説いたのですか。私は初めてこれを聞いたが、この教えを聞くために修行しているのです。もし後半の偈をご存知ならば是非聞かせて下さい。私は終身あなたの弟子となりましょう」と懇願した。

羅刹は、「自分の飲み物は人間

の生血で、食べ物は生肉である。長い間食べた事なく、どうすることもできなくなっている」これを聞いた青年は「もし私の血肉でもよければ差し上げますから、是非後半の偈を聞かせて下さい」と言った。そこで羅刹は後半の偈を唱えた。

この修行者即ち雪山童子は、覚悟の上のことだから、肉体を捨てることに何のためらいもなかった。しかし、このまま死んでしまつては、他の人々のためにはならない。そこで、辺りの石や、壁、道や樹木に、手当たり次第に、この偈文を書き留めてから、死後に身体の露出することを懼れて、衣服を整えると、高い木に登つた。そして、羅刹との約束を守つて、地上へと身を投げた。

ところが、雪山童子の身体が、まだ地上に落ちないうちに、羅刹は帝釈天の姿に還り、空中で童子の身体を受けとめると、地上に置いた。時に、帝釈天を初め、諸天の人々は足下にひれ伏して、童子にこう言った。

「あなた様は、無量の衆生を利益

して、無明の闇の中に、大法の炬（たいまつ）を燃やそうとする以外には、何も求めようとしない。あなた様こそは、真の菩薩です。そんなあなた様を苦しめたのも、ただただ、仏の大法を愛すればこそです。どうか私の懺悔をお聞き届け下さいまして、未来に悟りを得られた暁には、お救い下さいませようお願いします。」

後半の偈を聞くために身を捨てようとした雪山童子は、後の世のお釈迦様である。

また、この物語にちなんで、「諸行無常 是生滅法 生滅滅已 寂滅為楽」を、雪山偈とも呼び慣わしている。この話しは、余りにも有名で、あの法隆寺（聖徳宗総本山）の国宝玉虫厨子の台座の右側に描かれている。左側には、

これ又『金光明最勝王經』捨身品からの「捨身飼虎図」が描かれている。特にこの「捨身飼虎図」は、敦煌の壁画にもあり。極度の空腹に耐えかねた母虎が、今にも自分の子供を食べようとしているのを菩薩が見、自らは衣を脱ぎ、身を高所から投じて母虎に与える

といった時間的な流れのある事象を、同一画面上に表わすという描写方法で描かれており、専門的には、異時同図法と言われている。

この「雪山童子物語」の話しが、源為憲が著したとされる、冷泉天皇の第二皇女尊子内親王のために撰進した、仏教入門書ともいうべき説話集『三宝絵詞』（全三巻・九八四年成立）にも引用されている。その中の「雪山童子」（上巻、第一〇話）と題する物語に、「無常偈」（雪山偈）の翻訳歌として、

色は匂へど散りぬるを我が世誰ぞ常ならむ有為の奥山今日越えて浅き夢見じ酔ひもせず。

がある事は有名である。『大辞林』の「雪山童子」の解説には、真言宗の開祖の空海が「いろは歌」の作者だと、最初に言い出したのは、誰の仕業か分からない。だが「いろは歌」は「雪山偈」を意識したものだといいたしたのは、平安末期の真言宗の僧である

覚鑿であると『大辞林』には解説されている。覚鑿の説は定説に

なっている様である。戦時中の小学校六年生用の国語の教科書に収録されていた「修行者と羅刹」と題する小品では、この大般涅槃經の「雪山童子」を分かりやすく書き直した物語である。その「雪山偈を「いろは歌」に置き換えて、次のように解釈している。

花は咲いてもたちまち散り、
人は生まれてもやがて死ぬ。
無常は生ある者の免れない運命である。

生死を超越してしまへば、もう
浅はかな夢も迷ひもない。
そこにほんたうの悟りの境地がある。

（『教科書の歴史』 唐沢富太郎
創文社）

つまり「いろは歌」には、大乘
仏教の根本の教えとしての『空』
の思想が語られ、日本人の無常観
を考える鍵が秘められているので
ある。

蓮如は、それを「白骨のお文」
に『朝には紅顔ありて・夕には白
骨となれる身なり・すでに無常の
きたりぬれば・』と著したので
はなかるうかと、小生は思うので
ある。

●雪山童子が飢えた羅刹（釈迦を試すために変身した帝釈天）の空腹を満たすために、樹上からわが身を投じようとする姿を描いたものである。

そがしょうはく
曾我蕭白（1730～1781）は京都の商家に生まれ、宝暦から明和の頃には伊勢地方を遊歴して数々の大作を遺している。本図は朝田寺所蔵の「獅子図」等とともに、明和元年（1764）、蕭白35歳の作品と推定されている。また寺記によれば、明和8年に、松阪の村田彦左衛門祇昌が寄進したとある。

●資料引用 参考URL：<http://www.city.matsusaka.mie.jp/>



雪山童子図（三重県文化財 松坂市継松寺蔵）
曾我蕭白筆 紙本着
色／掛幅装、170.3 × 124.6 cm

■本堂瓦葺き替え予備調査報告■

浄信寺本堂の上棟式は、明治二十八年と記録されています。今年で一〇七年ほど経過しています。いずれ、屋根瓦の葺き替え等の改修工事が必要となってくると思っています。

過日この本堂を建てた竹中工務店に簡単な調査と積算を頼みました。細部には改装されている場所もあるが瓦や主要な構造は、ほぼ建築当初の姿を留めている。

本堂は全体的には、南東の柱に向かって七センチ程の沈下が見受けられる。土台の腐食やシロアリ等の原因ではなく、地盤沈下によるものと判断される。この部分は全面改修の必要がある。

正面の向拝の柱は、乾燥により曲がっており取り替えが必要。高欄は、雨風に直接さらされており取り替えが必要。内部構造等は、比較的痛みが少なく、全面たて起こしまでは不要と思われる。

この本堂瓦葺き替え工事についてはここ数年かけて、檀信徒の方々と共に考えていきたいと思っていますので、何かお知恵などあればお知らせ下さい。

浄信寺の
ホーム・ページです。

<http://www.jiin.or.jp/>

